

り2007年6月より休業し経過観察の方針とした。休業より5ヶ月経過した2007年11月に施行したCTでは、腹水が完全に消失していることが確認されCR症例と診断した。2008年4月現在、本人の希望により化学療法を再開していないが、依然としてCR状態は保たれ、末梢神経障害はGrade 2まで改善し、引き続き外来にて経過観察中である。

虫垂粘液嚢胞腺癌に対する化学療法の有効性についての報告例は少なく、自験例は新たな治療法の可能性を示唆する症例であり、若干の文献的考察を加え報告する。

## 2 直腸脱に対して Circular stapler を用いた経肛門的 S 状結腸直腸切除術の経験

桑原 明史・須田 武保・坂田 純  
日本歯科大学医科病院外科

【はじめに】高齢者の完全直腸脱に対して、Circular stapler を用いた経肛門的 S 状結腸直腸切除術を3例経験したので報告する。

〔症例1〕85歳、女性。6cmの完全直腸脱に対し、手術を施行(切除腸管は、10.5cm)した。術後経過は良好で、7病日に退院となった。術後3年再発は認めず(他病死)。

〔症例2〕81歳、女性。5cmの直腸脱に対し、手術を施行(切除腸管は9cm)した。術後経過は良好で7病日に退院した。術後4ヶ月目頃から直腸脱の再発(10cmの脱出)が出現し、Gant-Miwa-Thiersch法を施行し、術後3病日に退院した。

〔症例3〕88歳、女性。6cmの直腸脱に対して手術を施行(切除腸管は11.5cm)した。術後経過は良好で術後8病日に退院した。再発は無し。

【まとめ】本術式は侵襲が少なく、安全に施行できる。ただし、再発例を認めており、適応についてはさらなる検討を要すると考えられた。

## 3 Sessile serrated adenoma (SSA) の臨床的意義 — 内視鏡的摘除大腸早期癌の検討からみて —

岡 宏充・味岡 洋一・西倉 健  
渡邊 玄・加藤 卓  
新潟大学医歯学総合研究科第一病理学

【目的】近年前癌病変として注目されている sessile serrated adenoma (SSA) を併存する早期大腸癌の頻度を検討し、SSA の臨床的意義を明らかにすることを目的とした。

【材料および方法】内視鏡的摘除された M 癌 726 例と粘膜内部残存 SM 1 癌 56 例の計 782 例を対象とし、癌に併存する病変を過形成性ポリープ (HP)、SSA、鋸歯状腺腫 (TSA)、管状・管状絨毛・絨毛腺腫 (AD) に分け、それぞれの頻度と臨床病理学的特徴を比較した。

【結果】782 例中 AD または TSA 併存例が 730 病変 (93%)、SSA 併存例が 13 病変 (1.7%)、HP 併存例が 1 例 (0.55%)、併存病変のない純粹癌が 38 病変 (4.9%) であった。各併存病変別で年齢、最大径、男女比に有意差はなかったが、SSA 併存癌は右側結腸に好発する傾向がみられ、右側結腸癌においては SSA 併存例が 4.2% を占めていた。

【結論】SSA を介した癌化経路は存在するが、その頻度は極めて低く SSA の大腸癌発生母地としての臨床的意義は低い。しかし、右側大腸癌に限るとその 5% 弱が SSA を発生母地としている可能性があり、右側大腸の SSA の臨床的取扱いには注意を要すると考えられた。

## II. 主 題

### 1 レミケード投与間隔について考えさせられたクローン病 2 例

田中由佳里・本間 照・早川 雅人  
夏井 正明・姉崎 一弥・松澤 純  
杉山 幹也・渡邊 雅史

県立新発田病院内科

〔症例1〕14歳、女性。腹痛、下痢が1年前より